

額田先生より拝受の本 夢想神伝重信流・木村栄寿範士著
「大森流業手付及び口伝」から

大森流抜刀之事

師、長谷川英信から破門を受けた大森六郎左衛門の創作である「大森流」が、林六太夫の計らいにより夢想神伝重信流に取り入れられた曰くは次の理由による。

- 1・大森流が林崎大明神の教え「袈裟の一太刀」精神に則っている事。
- 2・表身・右身・左身・後身等が夢想神伝重信流の精神に則っている事。
- 3・時代を考慮に入れて、正座を用い、又大森流が初心者に覚えやすい事。

等の為である。日常の稽古に際しては、林崎大明神の御神託「**抜くな抜かすな、切るな切らすな、殺すな殺されな、大罪人たりとも懇切に説法し善人に導くべし。万一、従わずば詮方なく袈裟打ちかけて成仏せしめよ**」。とのもとに諸動作を行う。

即ち、相手が刀に手をかけるから、こちらも手をかける、相手が立つからこちらも立つ、相手が抜き付け切らんとするからこちらも其の先をとり先に抜き付ける。

従って、当夢想神伝重信流は、一挙手、一刀足、一動静毎に「袈裟の一太刀」の精神が満溢し、又示現されなければならない。

抜刀どうもう童蒙初心の心得に、次のように戒めている。
大森流は、打込て息続きたれば収て仕廻まで息続けべからず亦打込て大息を咄有腹空虚して気満たす慎むべし

初発刀

右足を踏み出し、向こうへ抜き付け、打ち込み、さて血振し立時足を右足へ踏み揃え右足を引いて納むる也

「理合」

夢想神伝重信流「表身右剣」より取り入れた業で、初めて発する刀故、「初初刀」と名付く。

相手、刀に手をかけ切りかからんとするを、先をとり相手の首、又は乳通しに抜き付け、攻め、更に猶予なく打ち込む。

正面に向かって正坐、一人対一人、この項では中間間合いとして口伝に従い、「童蒙初心之心持」を引用して記す。

(着座)

体様を直にして腹に力を入れ、両手は腿に置き手先はやや内方に向く。両肘は軽く体に着け、頤をつめ打ち向かう相手を見定める。両膝の間隔は一握り、両足の親指は重ねるか又は揃える。鐔は臍前一握り半とし、刀身は略略水平となる。

(抜付)

相手刀に手をかけるを見て、この方も刀に手をかけ鯉口を切る。両膝を合わせ、左右の手を刀にかけ立ち上がりつつ、両足爪先を立て、左手で鞘を後へ引き刃を徐々に外方に向けながら、恰も糸を引き出す如く、少しも滞りなくしかも猶予なく抜き出す。*抜刀に際しては、柄手を前に出して抜くは悪し。(口伝)

放れ際鞘を返すとき、柄の握り自然と心地よく、小指より取りさし順に指を締める心持にて、相手の首又は乳通し目掛け色も香もなく抜き放つ。

抜きつけた時、左の肩腰とも後へ引き、胸を照らし腹を張らし、片身ならず、向身ならず、所謂三角の曲尺にて半開半向となる。

右手は伸びやかに、右の手六分左手四分の心持で疑念なく引き分けるときは、右の肩抜かず、又刀が右に流れる事もなし、この時右の拳は切り手となる。

左右の足共直ちに踏み、後ろの臑の浮かぬよう、又前臑の打ちに倒れるは弱く、両臑は平行、床に対し直角となる。

業の引き合いは先ず目付けにあり、頤をつめ顔を俯けず、打ち込むまで相手の面より拳を見、打ち込むに連れて切り付けたところを見る。

刀の位は「水走り」とて肩へ水をかけ、切っ先まで滞りなく流れ落ちるは、あまり切っ先の下がりすぎである。

*初初刀は、極遠間合を目的とする刀法もあり、この場合、出来る限り右足を大きく踏み込み、それに連れて左膝を送って抜き付ける。

(攻め)

左膝を右踵付近に進めながら、追い込む如くして横震で攻め止まる事無く冠り右足にて打ち込む。

*初初刀では中震で攻める事もある。この場合、攻めの後上に冠り打ち込む。

冠りは、切っ先を倒さず、左肩の上に突っ込む心持。また冠る拍子に拳を下げたり、或は剣を下げて二段冠りとなるは、業の糸筋続かず甚だ悪し。

また冠った時一寸上を見上げてから打ち込むは、気筋貫通せず容も悪く慎む事である。打ち込みは手の内いかにも柔らかく冠り、身体を延ばし腰に覚えて、小指より順に締める心持で打ち込めば、刃並狂わず絶えきり良し。

右の手で勝って、右の小鬢より打ち込むは、曲芸とも言うべく悪し。拳を揃え、締めりよく調なう時は、太刀真直におりて切れ心地良し。

(血揮)

血揮（血振・血震）開き、収めは敵に逢った時のみの用ではなく、業の締りを着ける意もあり、残心を忘れず夫々心得て行う。

左手を柄から離し左腰の鞘を押さえ、右手は刀を返し柄の握りを緩め、大指と人差し指二本にて右方に開き肘を曲げて肩上的に取る。この時右手拳はこめかみ付近、張らず萎めず。更に人差し指より指を順に締める心持で肘を張るとき、自然と太刀先は丸く刃筋正しく下りる。

肘を張り、約45度の角度で刃筋正しく振り下ろしたとき右拳はほぼ腰の高さとなる。刀先は倒れた敵に向かい、柄手は止め手となり、また足は「きりきらず」として後膝は床よりやや上がる。

血振りの動作は途中で止まらず、一連の動作である。立つとき、後ろ足を前足に踏み揃え、より相手に近寄る。この時体屈かがまず延びきらず、少し前屈みとなり相手を見定める。

相手動かざるを認めたとき、右足を大きく引く。このとき、上体を直にし目付けは視野を広げる。

足踏み替えの間切っ先は相手につけたまま離さない。

(収め)

先ず、左手にてたなごころ掌 中程に鯉口を握りこみ、腹の中央臍前に保つ。左手の指はさして延ばすことなく、人差し指を添えるか、また握ったまま刀の鏝元付近より取る。

右手を右前に、左手を後に引き切っ先が鯉口にくると、左鞘手を返し鞘と刀は横一文字となる。

刀を鞘に収めつつ左手を臍前まで運び、次に右手にて刀を鞘に収めながら、徐々に刀刃を上を起す。

納刀中、左手小指は袴の帯に沿って移動し、身体から離さず、右柄手は前へ出さず、横にとらず、取り上げず、中和をよしとする。

収め終わったとき、右膝を床に着ける。収め込み、締りいて握りを離して立つ。

左刀

左足を踏み出し向え抜き付け打ち込みきて血揮いして立つ時足を前の左の足へ踏み揃え左の足を引いて納むる以下血揮いする業は足を立ちかえ先に出したる足を引いて納める也。

「理合」

夢想神傳流重信流「右身左劍」より取り入れた業で、相手左に在り、振り向いて左足を踏み出して切る故左刀と名付く。

正面に対し右向きに正坐、一人対一人、中間間合い、屋内。相手左に在り、気動きを察し顔を左に向けて見定める。

刀に手をかけ、右膝を左膝に寄せ、立ち上がりつつ左膝を立て右足の爪先立てて、左に振り廻り抜きかける。

左足を踏み出して抜き付ける。右膝を左足踵付近まで進め、刀水平のまま剣先を相手につけ横震に攻める。

間をおく事無く冠り左足を踏み出して打ち込む。冠りは切っ先を倒さずに、剣先を左肩の上へ突っ込む心持で、体にて冠る。

以下、血揮い、足踏み替え、納刀は初発刀に同じ。但し足は逆。

右刀

右足を踏み出して右へ振り向き抜き付け打ち込み血揮いし納める。

「理合」

相手右に在り、左刀と逆。「左身右剣」をとり、右足にて切る故右刀という。

正面に対し左向きに正坐、一人対一人、中間間合い、屋内。

気動きを察して顔を右に向け、相手を見定める。

左膝を右ひざに寄せ、左膝を軸にして右に振り回り、右足を踏み出して抜き付け、攻め、冠り打ち込む。

以下血揮い、足踏み替え、納刀共初発刀に同じ。

當刀

左回りに後へ振り向き足を踏み出し如く前

「理合」

後身である。相手後より刀を自由にさせまいとして、コジリに当るを以って「當刀」という。「後身左剣」である。

正面に対し後ろ向きに正坐、一人対一人、近間、屋内。

相手後にあり、コジリを取りに来るところを右膝を左膝に寄せ、振り放す如くして右膝を軸に左回りに後へ振り回り、左足を踏み出して抜き付ける。

以下左刀に全く同じ。

陰陽進退 夢想神傳流・陰陽進退替え業にあたる

初め右足を踏み出しぬき付け左を踏み込み打ち込み開き又左を引いて抜き付けあとは初めに同じ。

「理合」

業全体に亘り陰陽進退にして、業は大きく使う事。そしてこの業と気分において相手に勝つ。

なかでも、最も重点の置かれるところは、相手が右脛を切りに来るとき、相手の刀と切り結んだ時、又相手の剣を切り伏せ込んだ其の瞬間、陰か、陽か、進か、退か。この業にはいなし業あり。

正面に向かい正坐、一人対一人、中間間合い、屋内。

抜き付けは、童蒙初心心持の抜き付けに同じ。

相手たじろぎ退くところを、立って左足を踏み込み真向に打ち込む。

打ち込んだ体勢のまま、相手を注視しつつ右膝を床に着け開く。

開きは、胸を照らし、腹を入れ、腰を張り、拳は絹を裂く心持にて一時に尖き開くとき、拍子揃い引き合いがよい。刀刃は右方に向き、剣先は相手に付ける。

納め終わった時、左足を引き右足踵に腰を下ろす。この間、相手から目を離してはならない。

倒れた相手が再起して吾が足に切りかかるころ、鞘を返し刀刃逆さまにしながら立ち上がりつつ、左足を引き下に抜き合わせ刀刃にて受け止め、更に相手太刀を伏せ込む。

この瞬間が陰陽進退の最も大切な、しかも醍醐味のある要所である。(口伝あり筆舌に尽くし難し)

ここで相手の虚をつき、右足より踏み込み、体にて相手の太刀を払い上げ、更に体巻き込む如くして冠り、待たずして左膝を着き右足にて打ち込む。

以下、血揮い、足踏み替え、納刀は初発刀に同じ。

流刀

左の肩より切って掛かるを踏み出し抜き付け左足を踏み込み抜き請けに請け流し右足を左の方へ踏み込み打ち込む也やや刀を脛へ取り逆手取り直し納め膝を着く。

「理合」

相手の打ち込んだ刀を受け、更に流す事から「流刀」という。

この業は、抜き請けに請け流し、相手の腰車に打ち込む業である。

正面に対し右向きに正坐、一人対一人、相手八双、屋内。

八双より間合いに入らむとする相手を見つめ刀に手をかけ、両足を爪先立て立って刀を

抜きかけ、相手の打ちかかる時期を見計らう。

相手冠り踏み込んで打ちかかるを、抜いて左足を踏み出し、右手を頭上に取り抜き請けに請け（口伝あり筆舌に尽くせず）次の瞬間、右足を右前へ踏み開き相手の刀を流すや、刀を右肩に取る。この瞬間左足は間合いを計る。

右足を左足に踏み揃え、相手の腰車に打ち込む。この時膝を割り腰を落とす。

左足を引き、体にて刀を引き抜き、更に刀刃を直にして体容を整える。

両手をくつろげ、左肘を前方肩の高さに伸ばし、刀刃を前方に向け刀先を脛又は右膝付近に取る。

右手を逆手に取り直し逆手にて納刀、納め終わった時左膝を着く。

順刀

右足を立て左足を引引と一所に立ち抜き打ち也但は八双に切るあとは前に同じ。

「理合」

当流の介錯の法は古傳を以って順刀とする。介錯を受ける人は死人に同じであり、刀に順ずるところから「順刀」という。

介錯する人は、介錯執行と同時に神仏となる切腹者に対し殊更に着を尽くしてこれに当らなければならない。また介錯を申し付けられたときは、一度は断るべきであり、介錯に当っては相手の心境を察して、切腹者が死前に心の動揺を起こさないよう、特に注意を払って行う。

従って、終始諸動作は極めて静に、決して物音等させないように、細心の心を配らなければならない。

正面に向かって正坐、屋内外。

切腹者の視界に入らないよう、切腹者の左後やや遠間に位置して正坐。切腹者を見詰めたまま、両手を刀にかけ、爪先立てて右足を右方に出し、光の反射が相手の目に映らない様刀刃を横水平にして抜き出す。

剣先が円を描くように左から廻しながら、静に左足を右足に引き寄せて立って開き八双となり、鬼手仏心の心持ちにて介錯の時期を待つ。

*開き八双は、右拳を右肩付近に取り、刀先は僅か外方向に傾き、刀刃は相手の首に向う。

時期を見計らい、開き八双の角度のまま左手を添えて冠り、間合いを見計らい、右足を踏み出し一挙に首を打ち落とす。

刀刃を直にししながら充分に手元を引き剣先を下げ、体容を整え、刀を清める。

以下、納めは流刀に同じ。

立ち上がり、小足で数歩下がり死者に黙礼する。

逆刀

向こうより切って掛かるを踏み出し立って抜き足を引き揃え抜き打ちに切り右足を進んで又打ち込み足踏み揃え亦右足を後へ引き冠り逆手に取り返し前を突く逆手に納。

「理合」

止めさす時の、逆手に刀を握っての業をとって「逆刀」という。

正面に対し正坐、一人対一人、遠間合い、屋内。

何れの居合においても、当流は残酷なる打突を避け、相手を安楽死させる観念が必要であり、特に「逆刀」に於いて尚更顕現するもので、慎重実施が肝要である。

相手、八双より間合いに入り切り掛からんとするを、刀に手をかけ上体を低くし、右足を左膝内に踏み出して抜きかける。

相手切り掛かるを、左足を少し引き、更に、右足を少し引いて立ち上がりざま刀を上へ抜き、相手太刀を引き外すや、右足を踏み出し、諸手にて正面に切り掛かる。

この一刀は軽く、右手は肩の高さで止まる。

相手退くを右足を進めながら剣先を相手顔面につけて攻め、止まる事無く右足を踏み出し冠り打ち込む。

この打ち込みは相手水月まで切下げる。

以上は一連の業にして、理合いを^{わかま}弁え動作の緩急に特別注意する事が肝要。

左足を右足に踏み揃え右足を引き上段に冠り残心。

刀を下ろしつつ右膝を着く。

右手を逆手に持ち替え、左手掌を上にして左膝上に置き、右手拳は前頭部にとり右肘は概ね肩の高さに張り、刀背を左手に添え剣先を下に刀を垂直に保ち、相手頸動脈又は心臓を刺す体勢となる。

^{とど}止めを刺した後、上体を正し、刀先は左膝上、左手掌上に、刃を前方、刀を水平に保つ。

左手にて刀先の血を拭い、逆手のまま納める。納め終わった時、左足を引き、右足踵に腰を下ろす。

勢中刀

左の向こうより切って掛かるを踏み出し立って抜き付け打ち込み血揮いし納めるこの事は膝を着かず又抜き付けに払い捨てて打ち込む業もあり。

「理合」

勢いの中に動作を終るゆえ、勢中刀と名付けられる。

「勢中刀」、「虎乱刀」、及び「抜き打ち」は、何れも動作早く一連の業で一息に動作を完了する。

業手付けには「左の向こうより切って掛かるを……」とあるが、師傳により、正面に対し左向きに正坐、一人対一人、遠間合い、屋内。

八双に構え間に入る相手を見定め、両手を掛け機を伺う。

相手打ちかからんと冠るを、左膝を軸にして右に廻りつつ抜き、右足を立て左足を爪先立って、振り向きさまに右足を小幅に踏み出し、相手右拳目掛け、高め腰高に抜き付ける。間を置く事無く、右足より踏み込み、相手の刀諸共押しやる如くして払い、継ぎ足又は二足一刀、右より冠り右足にて真向鳩尾迄打ち込む。

立ったまま、血揮いをし足を踏み替えて納める。

***当流はこの業では膝を着かない。従って足踏み替えのとき右足は大きく引かない。**

虎乱刀

是は立事也幾足も走り行き内に右の足にて抜き付け打ち込み血揮いし納める也但し膝を不付。

「理合」

虎は乱れて走っても足音を立てず。この足を真似、虎走りにて行う一連の動作で一挙に行う。

正面に対し直立、一人対一人、極遠間合い、屋内又は屋外。

右手は右腿上、左手を刀にかけ両膝を曲げ腰を屈め、足指を合わせ虎走りとなり、両膝をすり合わせる如くして足音を立てず、幾足も虎走りに走り行くうち、

右手を刀にかけ、切っ先外れに払う心持で、乳通し目がけ右足にて抜き放し刀を止める事無く、又返さずに右より冠り、二足一刀右足にて打ち込む。

血揮い以下、勢中刀に同じ。

抜 打

坐している所を向こうより切りかかるを、受け流しに冠り真向に打ち込む。

「理合」

一連の業にして一挙に動作を終る。

両手を刀に掛け、爪先立って伸び上がり、刀を右斜め前に抜き出し、相手の刀を受け流す。猶予なく、両膝を開き諸手にて真向に打ち込む。打ち込んだ体勢のまま開き、納める。納め終わった時両踵の上に腰を下ろす。両膝をあわせ正坐にかえる。

完